大分合同新聞

ワークシート

平成と大分ー買い物

年　　組　　名前

① まちなかの商業人にとって、平成とはどんな時代だったのでしょうか。端的な表現を記事から抜き出しましょう。

マイナスとプラスがいっぺんに訪れた時代

② この記事からは、既存商店の競争相手が時代の進展で変わってきていることが分かります。「何から何に」という形で、記事中の言葉を使って書きましょう。

ロードサイドの店舗からネットショップに

③ 皆さんが買い物に何を求めるか、どうなったら買い物がさらに好きになるかを自由に考えてみましょう。

自分の買い物ライフスタイルから「必要は発明の母」で何かがひらめくかも！？

自治・まちづくり　第2部　変わる経済 ③

ご意見、ご感想をお寄せください　報道部　FAX 097・538・9674　heisei@oita-press.co.jp　年間企画

平成12（2000）年12月2日

新たな需要の創出を目指し完成したトキハわさだタウン（平成12年11月撮影）

大型出店で競争激化

衣料や食品を扱う店、レストランに映画館…。大分市植田地区の田園地帯に欧米の街並みを思わせる建物が姿を現した。

ショッピングセンター・トキハわさだタウンが平成12（2000）年12月2日、グランドオープンした。約4千台分の駐車場を備え、売り場面積は6万平方㍍を超える。百貨店などを運営するトキハグループが手掛けた。

「ボストンの落ち着いた街をイメージした」。開設準備室長だった本田大三（78）は子どもからお年寄りまでが楽しむ姿を思い描いた。

植田地区は平成8年に開通したホワイトロード（国道210号）と国道442号が交差する。市の新たな拠点地域に位置付けられていた。

「新しい町づくりだった。広範囲の商店に説明し、参加を呼び掛けた」。県外で買い物をする若者を引き留め、新たな需要の創出を目指した。

大型店の出店を調整する機能を持っていた大規模小売店舗法に代わり、周辺地域の環境保持などを主眼とした大規模小売店舗立地法が平成12年に施行。対象の千平方㍍を超える小売業は、土地に余裕がある郊外に向かった。

「ロードサイドの店舗はボディーブローのように効いた」。大分市中心部で生まれ育った矢野利幸（68）＝大分まちなか倶楽部社長＝は、既存商店への影響を説明する。

平成に入り、ダイエー、パルコなど大型店が次々と市中心部から姿を消した。わさだタウン、平成14年に開店したパークプレイス大分（大分市松岡地区）の集客力は、中心部にとって脅威だった。

状況が変わったのは平成27年。まちなかに大規模商業施設のJRおおいたシティ、県立美術館ができた。市の調査によると、23年に約29万人だった土日の中心部（35地点）歩行者数が27年には約35万人まで回復。「マイナスとプラスがいっぺんに訪れた時代だった」

（左から）本田大三さん、矢野利幸さん、宮明邦夫さん

近年はドラッグストアを含めたディスカウントストアの出店が目立つ。昨年度の県のアンケートでは、生鮮食料品や日用品などの最寄り品の購入先として、スーパーに次ぐ2番手になった。

昭和にぎわった佐伯市中心部の大手前、仲町といった商店街。今はシャッターが下りた店が目立ち、人通りはまばら。変化を見てきた市商店街連合会の前会長、宮明邦夫（60）は「商い人の力量が問われる」。変化は激しく、「今の最大のライバルはネットショップ。価格では太刀打ちできない」という。

大手量販店やネットにできないことは何か。客と触れ合いながら専門店の知識、技、地域の魅力をPRできないか。複数の店舗が協力し、商店主がパン作りやコーヒーの入れ方などを教える講座を企画した。「人と人の交わり、お客さまとの人間関係の構築が生き残り策だ」

物があふれ、家にいながらでも買い物ができる時代になった。消費者の利便性が上がった一方で、商店の競争は激化している。

＝敬称略＝

（指原祐輔）

（2018年5月24日付朝刊1面）